

会報順番番号 V-9

航空・宇宙部門

田島技術士事務所 田島 暎久

## 高野山

昨年5月末、初めて聖地・高野山の宿坊体験をした。数年前から毎年この時期に大学の運動部同窓生6~7人と数泊の旅行をするのが恒例になり、去年は誰が言い出したのでなく、ごく自然の流れで高野山宿坊に泊まって京都の寺コースに決まった。当たり前のことだが、皆、いつのまにか後期高齢者前後になって、高野山宿坊という、それ相応の選択をしたわけだ。

宿坊に来て先ず驚いたことには、泊り客のほとんどが外国人だった。宿坊事務所のお坊さんの話では、高野山が世界遺産になってから、お客の8割が外国人で、それもヨーロッパ人が多いそうだ。この日はスペインの団体がほぼ占有してスペイン語が飛び交っていた。ほとんどが我々と同年前後の年配者で、英語で話しかけてみたが通じなかった。

宿坊の朝は本堂での「お勤め」で始まった。もちろん参加自由だが、大勢のスペイン人が既に占拠していて、我々は角の方に残っていたスペースに座った。木魚、太鼓、によりはち（シンバル）などの鳴り物入りの賑やかな読経が始まった。こんなお経は初めて聞いた。心地よいリズムとメロディーとともに主役を務めるお坊さんのテノールがお堂に響き渡って、まるでオペラかミュージカルの一場面を想像した。周りのスペイン人を見ると、じっと聞き入っていた。退屈して眠りそうな人は誰もいなかった。この逆に、我々が西欧の教会でミサ曲を聴く場面を想像して、音楽は宗教を超えたグローバルなものだと感じ入った。

朝食の後は、護摩法要に参加した。ここでも大勢のスペイン人が陣取っていた。読経とともに火がたかれ、ピークに達して火柱が高々と上がるたびに「オー」と、どよめきが響いた。彼等にとっては、これはまさに「火のショー」と映ったようだ。

付近を散歩しようと部屋を出て玄関に行くとなだかりで騒々しい。しばらくするとサイレンを鳴らして救急車が到着した。周りを囲むようにできた人垣の隙間から覗いてみると救急隊員が外国人の老人にAED処置を施していた。その老人には見覚えがあった。朝食後にコーヒーサーバーの前でジェスチャー交じりの会話を交わしたスペインの老人だった。

救急車で運ばれて行って、しばらく経った頃、また玄関付近になだかりができた。今度は警察官が添乗員の通訳を介してスペイン人のグループに聞きながら何やら調書を取っている。あの老人が異国のこの高野山の宿坊で亡くなったのだった。つい先ほど、コーヒーサーバーの前でほんの数秒間、身振り手振りですたない会話を交わしただけなのに、名前

〔日本技術士会岐阜支部 会報の情報連絡先〕

〒509-0108 各務原市須衛町1-179-1 テクノプラザ5F  
TEL: 0583-79-0580 FAX: 0583-85-4316 Email: gcea9901@ybb.ne.jp

さえも知らないのに、何とも言い難い親しみと哀悼の念が込み上げてきた。高野山に漂う気配がそれを助長したようだ。

欧州の遠き国より来し人の 天に旅立つ高野の山よ

現役時代に仕事と旅行であちこちを訪れた折、その土地の音楽にも巡り会えた。ニューオーリンズのジャズ、ナッシュビルのカントリーソング、メキシコのマリアッチ、ブラジルのサンバとボサノバ、ブエノスアイレスのタンゴ、等々。どれも理屈抜きで楽しく心地よくさせてくれる。高野山の読経もその一つだ。

以上